



篇
下

9
3406
4



櫻井藏書

道一翁道話二篇卷下

八宮齋輯

先づ今日の有難ひ事一つは、
 らしむしや。一日の御りぬめ、
 ば、
 の、
 く、
 て、
 ら、
 さ、

道話二篇 卷下

故
 櫻井理行氏
 大正五年
 十月廿日
 櫻井氏の
 室贈

卯の死しへゆらぎし物まや人がゆるりゆでござり
 せん。ふぞい意然と毒茶と下りりませり。驚
 ちあふも吐息けきまをそのどくろ子ト下り驚く
 と業一取程のまじりも毒茶をせせり。が
 能ししうがらやゆれ入りまき。天命の生あるを
 ねの恨とひて殺す時いよのさうりよさるしのさ
 暫ふてる能が死ころるこが死まひよなるせりや
 なぬまも氣の毒どくろりて。二十日つらひに
 ねこつゆとせりやゆれぬが念思。まもせり。し
 ぶト下り。ト下りも口答。さうりゆらぬ

ゆらぬゆらぬ逢ふやまを程とま。ちりてもたりのひ
 素直して。ゆらゆらでも後立ふゆらぬ。けこ
 十日の内より船と一生の考ゆと死越てぬりぬい
 かなぬまがねあふりハイくイヤモウらぬ。く死で
 下りゆらゆら。二十日あら。ふ十日が百日でもぬら
 せり。うらうらしくま。くおまもむ。ぬきひはたし
 モ。今日を。ま。くお。でも。で。機
 ね。ゆき。コレ。何。い。ち。ら。て。も。ア。り。く。念
 後。も。後。立。ふ。ゆ。ら。ぬ。で。ハ。り。く。畏。り。ま。り。さ
 り。よ。り。之。別。を。ね。ゆ。ら。ぬ。そ。ら。ぬ。の。ゆ。す。ま。の

依りて。向ふとどらりありて。一して。えゆくや。きぬい。
 弓矢の坊の業トヤ。娯極のあまのきり。あて。あるし。
 能へ。このものトヤ。今。た。い。そ。ろ。く。娯極の。方。り。家。世。
 の。横。録。な。ご。ご。る。も。こ。ゆ。も。け。き。ひ。の。よ。ら。や。ら。と。仕。
 与。て。つ。の。ふ。大。種。入。畜。一。や。ま。い。の。家。ハ。ハ。レ。く。こ。こ。一。何。
 も。寒。ひ。ゆ。い。ご。ご。り。す。せ。ぬ。お。ま。く。ぬ。が。き。ひ。時。か。よ。ハ。
 知。り。ま。れ。し。ハ。持。あ。が。あ。り。す。せ。う。あ。ま。ぬ。が。イ。ヤ。レ。
 可。い。は。ら。う。た。か。知。ら。が。能。い。ご。ご。る。業。ト。て。り。る。
 可。く。娯。極。の。ゆ。り。ま。じ。さ。ま。や。う。し。ひ。の。ト。ヤ。娯。極。の。ゆ。
 う。と。ト。ヤ。う。ん。と。後。の。あ。が。あ。ま。ぬ。や。よ。う。ら。て。娯。極。ぬ。

り。く。し。て。決。ま。し。て。家。が。の。り。う。く。成。て。あ。ま。ぬ。
 う。と。ま。え。ん。坊。の。娯。極。ぬ。が。日。の。入。も。物。よ。う。う。ゆ。て。あ。
 こ。も。の。と。あ。あ。し。て。ハ。家。又。や。う。り。冷。し。う。り。正。座。な。
 も。の。ト。ヤ。家。ハ。何。り。も。も。ハ。い。く。ぬ。あ。ま。ぬ。族。の。ゆ。あ。ま。
 ず。ぬ。か。り。由。の。か。ら。い。ま。な。な。れ。て。り。う。り。す。せ。イ。ヤ。レ。
 と。い。ト。ヤ。ご。ご。ぬ。年。あ。が。物。く。こ。て。何。よ。う。や。う。い。ぬ。
 娯。極。後。の。知。持。が。面。白。い。め。て。あ。う。と。ま。が。あ。て。娯。極。の。
 引。お。け。し。も。色。の。もの。と。え。お。し。も。こ。ゆ。の。ト。え。が。
 き。た。う。損。ど。て。あ。る。も。と。ま。ま。あ。ま。し。こ。り。け。あ。く。
 ず。り。く。娯。極。ぬ。あ。ま。ぬ。大。氣。を。ま。う。り。て。能。い。ま。う。

そのどや公持さへ嫉しうなりと。何んも欲んやん
公のゆとやどくゆん是納すれあは極樂

是納とするそねぬの胸の中地獄も何れ極樂なり。

けはる海女の教付がむしくと嫉しよよ成て居て。

家の敷色の悪いと業じてこそ好まはけるうきまり

う敷色が悪ひのどもあふいかんや。今煩うそと

る。子依の猛羊に知れそゆとや。あれも大群志成

なるゆとやかん。今ゆりでも味なくハ何んやんもじ

らしくおせう程よ。随分煩うぬやううてりれや

志実志身あまのゆ。家うす成て後らゆも

もやう時もちりぬてある。叔はすぬのい嫁とや。

胸を弄れぐるりつとまきよて。是がア何んの手とや

どい一向日けのむぬねぬてある。ア何んもや

どやあの嫁ぬえ何んぞおれそわやせぬかぬ。

らんまりで合点がゆぬ。是まがいのくぬきの鬼に

のやうふつてある。け比の権まていせらもあやう

すれ子佛婆やぬとや。アリと後と教よよといふそ

勿辨ちん。ヨウ野が者うたんとゆとや。家も又目

く受て居。有親ひものどや
雲くはて後のきうとさふか。もまをり。まよの羽

「よめを生れけりおそわきど皆あしよなかりけり。
 是が能くしこのでけしえの家の心のゆゑに安んじを救
 すもやれど。膝の折ひが考ひの仕業トやふりて。
 安んじを佛よをくしつことこのトや。きて能くは念念
 せしりませ。口でこのやういふも。何もこのやういふ
 ても膝の折ひを救ふまぬ。何んでも身よあめぬ
 刺さるやん。短夕おのがけり業が大車トや
 何の考ひも久くもねども。あしけりやういふは
 けり家の考ひがわきよ目を見てきて。コリヤこしつて
 死にハやいし。あしよ醫者屋のあしきりて付く。やういふ

むねの死にけり。あしめ業をよりしりませ。醫者屋
 せそとむねも念念の折ひ三寸法念の瘡治すと
 せしもやぬよごする。うきやどい。イエとよ
 のよのいごうませぬあの佛のやうなむねと
 した何人の車トやごごい。先目くのひ業の消る
 やうなひ業と。あしやうませ。醫者屋。あしと
 せし。あしやう。あしやう。あしやう。あしやう。あしやう。
 たん。何人のうそと。あしやう。醫者屋。あしと
 流し。あしやう。あしやう。あしやう。あしやう。あしやう。
 のう。あしやう。あしやう。あしやう。あしやう。あしやう。

多しりて難んば道し何れと

道二翁道話 三篇出来

道二翁道話二篇卷下終

寛政八年丙辰秋八月發行

静安舎之部

弘所書肆

大阪心齋橋南壹丁目

敦賀屋九兵衛

同 谷町筋錫屋町

本 屋吉兵衛

